



「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの活動からその社会的意義を問う（フィールドレポート1）

磯本, 宏紀

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:98-102

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489538>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489538>



Field **1** Reports

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの 活動からその社会的意義を問う

磯本 宏紀

一 はじめに

兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会(二〇一四年一二月発足)を中心として、「鳴門の渦潮」の世界遺産登録をめざした活動が進められている。行政、議会、議員や各種関係団体で構成されるもので、このなかには学術部会がある。これは、鳴門海峡の渦潮の世界遺産登録推進に必要な調査研究を行うことを目的とした部会で、文化系と自然系に分かれて活動している。自然系は兵庫県淡路県民局が、文化系は徳島県文化資源活用課がそれぞれ事務局を務めている。

本稿では、この「鳴門の渦潮」世界遺産登録をめざした活動で、学術部会の末席にて筆者がかかわってきた調査研究活動を紹介する。また、こうした活動の社会的意義や展開につ

いて考えてみたい。それは、こうした活動が一義的には世界遺産登録に向けたものであるが、その一方でこれとは別の効果を生んでいるように考えるからである。

筆者は、「鳴門の渦潮」世界遺産登録に関連して、これまでおもに二つのプロジェクトに参加してきた。一つ目は「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会で、二〇一四～二〇一五年度にかけて調査や会議に参加し、『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査報告書『文化編』(「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会 二〇一七年発行)に小稿を発表した。もう一つが「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会で、二〇二〇～二〇二二年度にかけて調査や会議に参加し、『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』(「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会 二〇二三年発行)に小稿を執筆した。それらは、いずれも海(鳴門海峡等)と関



写真1 鳴門海峡の一本釣り漁船（2020年11月筆者撮影）

わる人の営みとしての漁業を扱ったものだった。

二二〇一四〜二〇一五年度「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会での調査

この調査では、筆者は徳島県鳴門市沿岸地域で漁業と海産物に関する調査を進めた。このとき連携して調査研究を進めたのは、おもに徳島県側の研究者、徳島県側の資料を扱う研究者が中心だった。

調査対象地区は現在、「鳴門わかめ」のブランドで知られるわかめ養殖地帯であり、そのわかめ養殖、加工が調査地区では生業の中心となっている。一方で、このわかめ養殖に何を組み合わせ、並行して行うのかで地域の個性が表れることにも気づいた。ハマ

チ、タイなどの魚類養殖の地区、さつまいも栽培など農業を組み合わせる地区、小型の底曳網漁業を行う地区、一本釣り漁を行う地区などであった。漁業集落を訪ね、聞き取り調査を進めた。

これらの調査地区のなかで、鳴門市瀬戸町堂浦地区は、鳴門海峡に出て一本釣り漁をしてきた地区であり、鳴門海峡の漁閑期には瀬戸内海沿岸域、紀伊水道沿岸域から高知県や九州北部に至るまで一本釣りで出稼ぎ漁に出ている地区である（写真1）。少なくとも、この出稼ぎ漁は、江戸時代中期ころから昭和中期ころまで続けられてきた慣習があった。鳴門海峡を主な漁場としながらも、広く西日本各地に漁場を展開してきた。昭和戦後期の話として、親子で冬場に高知県室戸港に停泊させて船上で寝泊まりしながら、毎日沖に出て釣り漁をした話、和歌山県へも同様に出張ぎ漁に出た経験を教えてもらった。そうしたなかで、印象に残った話を一つ、紹介しておきたい。

昭和中期ころのことである。堂浦地区の釣り漁師は、始めは親から漁を教わる。親が漁師でなければ同地区の人から教わる。漁を教わった師匠は親も同然で、一生のつきあいをする。このように慕っていた漁師が鳴門海峡で一本釣りをしているさなか、淡路島側から来た網船に

漁具をひっかけられ、失う事故があった。このことに対し、先方から謝罪も補償もなかったたので、彼に漁を習った堂浦地区の若い漁師たちは、けんか腰で先方の地区に乗り込み、相手方の船と漁具を打ち壊して帰ってきた。

もちろんこの事件自体はあるまじき暴力行為ではあるのだが、当地の漁師が受け継いできた気風を感じることのできる話である。そしてこの話の前提には、同じ海域に異なる漁法、異なる地区の船が入り交じって操業していたことがあり、ときには地区間、漁師同士の争いを引き起こしてきた歴史的背景があったのである。

三 ニ〇二〇～二〇二二年度「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会での調査

先に紹介した調査はおもに鳴門市域での調査によるものである。だが、対象とした漁師の移動がその領域をはるかに越えている以上、そのエリアの調査だけでは不十分なのは明かである。二〇二〇～二〇二二年度の調査では、そうした点を課題としつつ、兵庫県南あわじ市沼島を中心に調査を進めた（写真2）。このとき連携したのは、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室を中心とする兵庫県側の研究者だった。

調査を進めるなかで、沼島から延縄漁による紀伊水道から太平洋沿岸域への出稼ぎ漁としての出漁の実態について確認することができた。沼島沿岸での漁を基本としながらも、漁閑期には和歌山県、徳島県、高知県など各地の漁村地域に出漁し、長期滞在しながら漁をしてきた。延縄漁のえ



写真2 南あわじ市沼島（2020年12月筆者撮影）

さは出漁先で入手し、出荷を現地で行ってきた。現在はこうした出稼ぎ漁の慣習がなくなつたが、少なくとも江戸時代から継続して行われてきた漁の形態である。こうした漁を継続するなか、他地区の延縄、一本釣り漁師らとの接触、出稼ぎ先の漁師らとの接触、そして来訪してくる他地域の異なる漁法をもつ漁師らとの接触などを確認できた。

こうした移動は、経験者からの聞き取りだけでなく、漁協に保管された文書からも裏付けることができた。資料として十分に整理されていないものの、漁協には漁場図、漁場管理、

漁法等に関する大量の文書が保管されている。多くが明治期から昭和期の近代漁業文書である。調査報告のなかでも関連文書の一部を使用した、未確認のものは多い。

もう一点、漁師の移動だけではなく、テグス業者による仕入れ、取引等の関係性を確認できたのも成果だった。これは洲本市由良での事例である（写真3）。明治期から昭和期にかけて、由良では釣り糸に使うテグス製造がさかんに行われた。地元漁師による漁具としての需用だけでなく、広域に出荷、販売する目的で、家内工業により生産されていた。材料を仕入れ、職人をつかって加工し、販売するスタイルである。天然テグスの材料となるのは、テグスサンなどの幼虫の絹糸腺である。良質のテグスを取るためには、おもに中国海南島



写真3 洲本市由良の元テグス工の家に残る磨テグス（2022年7月筆者撮影）

からの材料の輸入に頼ることになるのだが、材料とする粗テグスの仕入れのネットワーク、そして加工した磨テグスを販売するためのネットワークが重要になる。調査時、こうした製造と販売に携わった方にめぐり会え、当時のようすを聞き取ることができた。なお、この家に残っていた磨く前の粗テグス、磨いて製品化した磨テグスは、筆者が所属する徳島県立博物館の博物館資料として寄贈してもらった。

ところで、新たな成果や文書の所在確認ができた一方、課題を残すことになった。とくに、先述の沼島漁協所蔵文書の整理の問題は、今後の重要な課題となっている。大量にある文書の目録をつくり、デジタル撮影をし、利用可能な状態にすること、こうした基礎的な整理作業は、所有者である沼島漁協の要望でもある。フィールドで調査を進める場合、ときには使用する資料の整理について直接依頼を受けることがある。資料の利用を許可してくれた漁協に対する責任と恩返しとして、善処するべきである。人数をかけた計画的な整理が望ましいかたちと思われ、方法の模索は続いている。

四 社会的意義と発展性

世界遺産登録を目指した活動は、観光政策、文化観光と結びつくものである。そのなかでの学術部会の活動は、代表的

な観光地に関することだけではない、広域にわたる地域情報の発信に結びつく成果を産んでいると言える。その地域情報に、学術研究の成果が加わることで、多様性、重層性を持ちうるものになると言える。

筆者自身、義務的にではあったが鳴門市域の海辺、淡路島・沼島の海辺を調査で歩くことが、人脈が広がり、諸々の情報や調査データが増え、新たな研究課題に結びつくきっかけとなった。そのなかで、調査成果を報告書に執筆し発表したことにより、活用され、発信されうる地域情報のひとつを産んだ。

もちろん、執筆して公開するだけでは不十分かもしれない。同じ活動に関わる人たち、対象とした地域の住民、さらには広く世間に共有されてはじめて、第三者による発信の素材となり、波及効果が生まれるのである。SNSの用語を借りれば、シェアされたり、リツイートされたりすることで、より高い波及効果をもたらすのである。そのための模索が重要であろう。市民講座など一般への普及的な活動もそのひとつであろうし、基礎的な資料整理の作業も活動の足腰を強くするものとなる。アーカイブ化や先鋭的なPR活動も必要なことだろう。調査成果をいかに使い、使ってもらえるか、世界遺産を目指す活動のなかで、そのプロセスこそが社会的意義を見出すことのできるものとなりうるのである。

既知のことであるが、世界遺産へのハードルは高い。行政

サイド、研究者サイドだけではなく、幅広い市民運動となっていくことが重要である。この点は、観光業者、地域振興の関係者への広がりには未だ過渡期の段階にあるが、こうした取り組みのさなかで、新たな連携が生まれ、新たな資料の発見に結び付いていく往復関係の可能性があるのである。

参考文献

- 『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査検討委員会編 二〇一七
- 『『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査報告書』文化編』『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査検討委員会
- 『鳴門の渦潮』調査研究プロジェクト実行委員会編 二〇二三
- 『『鳴門の渦潮』と淡路島の文化遺産』兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室